

北陸歴史探訪

金沢学院大学 名誉教授
ひがしよつやなぎ ふみあき
東四柳 史明

第3回

かながさきじょう 越前金ヶ崎城の攻防と新田義貞



天筒山展望台から金ヶ崎城跡（敦賀湾に突き出た小高い山の部分）、敦賀湾、敦賀半島を望む

建武3(1336)年5月25日の摂津国湊川の合戦^{※1}（現神戸市兵庫区・中央区）で、足利尊氏軍に大敗した後醍醐天皇方では、楠木正成が討死し、新田義貞は京都に潰走した。そのため5月27日、天皇は義貞らとともに京都から比叡山に逃れた後、再び京都をめぐり足利方と激戦を展開した。この間、尊氏の弟直義主導で、秘密裏に双方の和平工作が企てられ、後醍醐天皇は尊氏と講和し、京都に還ることになった。

義貞の越前下向

後醍醐方の総帥であった新田義貞は、この和平に不満を抱いた。そのため後醍醐天皇は、義貞をなだめる方途として、10月9日、義貞に天皇の皇子の恒良親王と尊良親王を奉じて北国に下り、越後や関東の勢力と結んで、戦局の好転をはかるよう密命した。

天皇は翌10日、京都に還幸したが、尊氏によって花山院に幽閉されたため、12月21日夜、密かにそこを脱出して大和国の吉野に赴いた。ここに尊氏に擁立された京都の光明天皇^{※2}（北朝：持明院統）と吉野の後醍醐天皇（南朝：大覚寺統）が対立することになった。

一方、新田義貞一行は、10月上旬に比叡山を下って、琵琶湖西岸の近江国堅田（現大津市）から船で北岸の

かいづ 海津（現高島市）に向かい、そこから七里半街道経由で越前国をめざした。しかし途中で越前守護の斯波高経軍に阻まれ、やむなく道を東に変え、同国塙津（現長浜市）から椿木坂峠、越前国柄ノ木峠へと進み、板取（現南越前町今庄町）から西に折れ、木ノ芽峠越えで、10月13日敦賀に到着した。『太平記』^{※3}によれば、新田軍は途中猛烈な吹雪に遭い、多くの凍死者が続出したとみえ、敦賀では、氣比宮社官の氣比氏治に迎えられ、敦賀湾を眼下に望む金ヶ崎城に入ったとみえる。

金ヶ崎城は、天筒山の尾根筋の先端が海に突き出した、標高86mの丘陵上で、難攻不落の天然の要害であった。二人の親王を奉じる新田義貞・義顕父子は、ここで建武3年の冬を越すことになる。

金ヶ崎城の合戦と陥落

越前に下った義貞の誅伐をめざす足利方では、年暮れの12月に、直義が諸国に武士たちに、義貞の拠る敦賀津（金ヶ崎城）攻撃のための軍勢催促を行っており、明けて延元2／建武4(1337)年^{※4}1月1日、高師直を総大将とする足利の大軍が海陸から金ヶ崎城を包囲し、同月18日より総攻撃が始まった。以後1月から2月にかけて、足利・新田両軍の間で、度々激し

※1 京都を追われて九州に落ち延びた後、九州勢を味方につけ京都奪還を目指して東進していた足利尊氏軍と、これを迎え撃った後醍醐天皇方の新田義貞・楠木正成連合軍との合戦。兵力の差は歴然であり、楠木正成は討死に、新田軍にも大量の投降や寝返りが起った。

※2 北朝（持明院統）最初の天皇（現在の皇統譜では北朝第2代天皇）。後醍醐天皇（第96代）は光明天皇への譲位と自らの退位を認めず、1392年に南朝第4代後龜山天皇（第99代）が北朝第6代後小松天皇（第100代）に譲位するまで南北朝時代が続いた。

※3 南北朝期のほぼ唯一の軍記で、内容の批判は必要だが、資料としては重要。

※4 南北朝時代には、南朝・北朝それぞれに元号があり、南朝の延元2年、北朝の建武4年は、いずれも西暦1337年にあたる。

い戦闘が展開された。

この間、2月5日には、義貞が弟脇屋義助らを伴って、密かに金ヶ崎城を脱出し、新田方に転じた瓜生保を頼り、約20km離れた南条郡の杣山城（南越前町阿久和）に逃れた。その後同月16日には、義貞等は同城を出て金ヶ崎城救援に向かうが、途中敦賀郡櫻曲付近（現敦賀市内）で、足利軍に阻まれ、激戦の末、瓜生保は討死し、義貞・義助兄弟らは、辛うじて杣山城に戻った。『太平記』には、籠城が続く金ヶ崎城では、既に兵士の食糧が著しく欠乏し、城内で刺殺した馬や戦死者の肉を食して、戦いを続けていたとある。

3月2日から4日間にわたり、高師直の指揮のもと金ヶ崎城の攻撃が夜間を通して再開され、同月6日寅卯刻（午前5時）に至り、城の大手から城内に攻め入った足利軍によって城が焼き払われ、金ヶ崎城は陥落した。このとき尊良親王と新田義顕・氣比氏治は自害し、恒良親王は氣比氏治の子息齊晴の手引きで、敦賀湾に小船で逃れたが、翌7日に、南条郡蕪木浦（現南越前町甲築城）で捕えられて、京都に連行された後に毒殺された。

足利方では、当初この落城で、新田義貞が戦死したものと誤認していた。しかしやがて義貞・義助兄弟が、落城の以前（2月下旬頃）に、密かに金ヶ崎城を出て杣山城に移っており、生存していることが明らかになった。この行動は、後世に総大将の義貞が尊良親王を見捨てたものと、その軽率さを誹られ、非難されることにもなる。

義貞の再起と討死

杣山城に拠る新田義貞軍は、金ヶ崎落城後も守護斯波高経勢と越前各地で活発に合戦を続け、越後の新田党との呼応もあって、次第に勢力を回復しつつあった。延元3／建武5（1338）年2月中旬、新田勢が杣山城を出て、足利方の斯波軍を鯖江宿の合戦で撃破し、高



金ヶ崎古戦場（敦賀市金ヶ崎町）



新田義貞（福井市毛矢・藤島神社蔵）

※5 死後に首を晒しものにする刑罰。梶首（きょうしゅ）、晒し首。

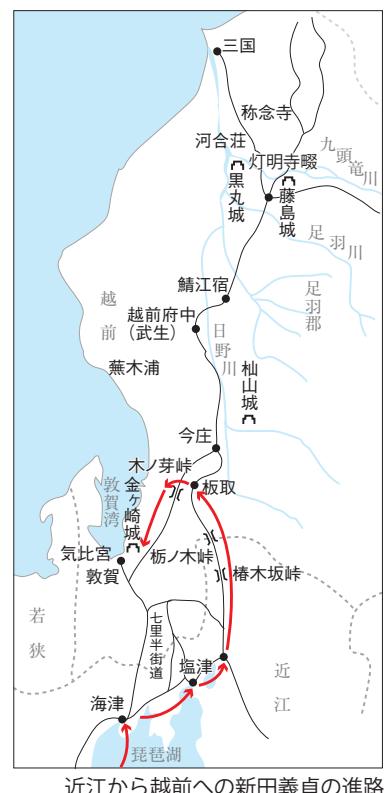
経を足羽城（福井市内）に追って越前国府（現越前市武生市街地）を制圧すると、その勢威は高まった。

さらに同年5月には、越前国内の敵方の城70余カ所を攻め落とし、高経を足羽郡の黒丸城（現福井市黒丸城町）に追籠め、翌6月になると越後の南朝方の大井田氏経らが、軍勢を率いて越前に来援する動きもあった。

これに対し斯波高経方では、越前における劣勢を挽回するため、白山平泉寺の旧領藤島荘の回復を条件に、義貞方の同寺衆徒を味方に引き入れたため、衆徒が黒丸城の支城である藤島城（現福井市藤島町・林町）に入り同城を固めた。そのため新田義貞・脇屋義助軍は、吉田郡河合荘（現福井市内）に集結し、黒丸城など足羽郡内の斯波方諸城の攻撃を開始する。

7月2日の夜、新田義貞は、平泉寺衆徒の籠る藤島城包囲の新田軍の様子見をするため、50騎を率いて同城に向かった。その途中、斯波方の細川孝基・鹿草彦太郎の軍勢300余騎と灯明寺駿（現福井市新田塚）で遭遇し、深田で馬ごと倒れたところ、眉間に白羽の矢を受けたため、もうこれまでと太刀を抜いて自らの首を切り、自害して果てたとされる。

このとき畦道を伝って義貞の首級を挙げた氏家重國は越中の武士で、義貞のものとは知らず大将斯波高経の許に持参し、首実検に供したところ、その所持品と左眉上の矢傷跡などから、義貞の首級であることが判明した。義貞の遺骸は、時宗の僧たちによって吉田郡長崎（現坂井市内）の往生院（称念寺）に運ばれ、葬儀の後、朱の唐櫃に納められた首級は、討取った氏家重國が随行して京都に送られ、獄門^{※5}に懸けられた。



近江から越前への新田義貞の進路